

## シリーズ「発想のたまご」

### 君に志あるならば

名古屋大学地球水循環研究センター  
准教授 熊谷 朝臣

まず、この水文・水資源学会誌（水水誌）の役割について、研究者・技術者間の交流、初学者・現場に対する素晴らしい研究成果（既に、どこかで発表されているという意味）の紹介と講座、世界・本邦の研究情勢の紹介、という部分について異を唱えるつもりは全くありません。僕自身、今でも過去の水水誌を持ち出してきて勉強させていただくことは、よくあります。問題としたいのは、若い人が、成果を原著論文として水水誌に投稿することです。

若い人に言いたいことは、「もし、その成果に自信があるなら、水水誌に投稿してはいけない」ということです。論文は（世界中の）人に読んでもらってナンボです。水水誌に載ってしまった論文は、人に読まれることはありません。読んでくれるのは、日本のさらに狭い仲間内の間でしょう。世界のどこの物好きが、この分野のレビューをするのに、わざわざ水水誌を手に取りますか？（研究）人生は有限です、人は、権威ある雑誌から手に取ります。そもそも、ある学術誌（＝国際誌）で論文の査読を受けて、「この部分は水水誌に載っている」なんて指摘を受けること、想像できますか？

たまに、「この論文のレベルは高いけれど国内誌（例えば、水水誌）に載せたい」とか「この（国内誌に載ってる）論文は国際誌レベルだ」なんて言葉聞くことがあります。じゃあ、最初から権威あるところに投稿して下さい。上で言った通りです、読まれない論文は書かなかつたと同じです。僕の話をしなすと、自分なりに「このレベル以下の雑誌には絶対に投稿しない」、「どんなに酷い研究をやっても、このレベルの雑誌には必ず載ることができる」という基準があります。もし（万が一）自分の設定している最低レベルの雑誌に載らないという事態が

起こるなら、僕なら自分のホームページで誰でも見ることができる形で紹介します。そんなレベルの研究をすることは絶対にないと思っはいますが。

学会を盛り上げるために、あえて論文を国内誌に投稿するって話も聞くことがあります。あなたが功成り名遂げた大研究者なら、それも有りでしょう。でも、今、まさに羽ばたこうとしている若い人に、その義務はありませんし、そもそも、そんな力を持っているはずがありません。良い成果を挙げたなら、世界に通用する形に論文を仕上げ、少しでも権威ある雑誌に投稿すべきです。そもそも、学会を盛り上げることに意味はありません。意味があるのは、素晴らしい科学的発見を通してその学術分野を盛り上げることです。

とは言え、権威ある雑誌に投稿できるような一流の成果を挙げるのは簡単なことではありません。それを若い人に要求するのは酷な話なのは分かっています。急に、所属する研究室・指導教員が優秀になるわけではないですから、一つだけアドバイスできることは、その気になれば、あなたは自分の研究環境を変えることができるということです。昔、ガンガンにスポーツをやっていた頃、先生がこんなこと言いました。「ヒマラヤに登るつもりの方は、練習で富士山に登るだろう。富士山に登りたいと思っている人は、日頃から近くの山に練習として登るだろう。普段から散歩もしないような人は裏山に登るのもきついでだろう。人は、目的設定で能力が変わるんだ。」確かに、僕が所属してたところは一地方大会から世界大会までチャンピオンクラスの人が一杯いて、練習についていくのが精一杯で、先生の言ったことを実感することができました。置かれた環境のせいで、みんな自然と強くなってしまった感じがするのです。権威ある雑誌にバンバン論文を掲載させている集団に飛び込んだら良いのです。

だから、若い人に言いたいです。もし、あなたに志あるならば、あなたの論文の投稿先は水水誌ではありません。もっともっと高みを目指して、権威ある雑誌に投稿すべきです。